秩序建設に協力することによつて、如何にして戰敗の自國を再建するかにあるであらう。新らしきペタン支配下のフランスは、「祖國、家庭、勞働」をその政治原理として掲げてゐる。が果してこれによつて「自由、平等、博愛」の標語によつて代表される古きフランスを克服しうるであらうか。問題はフランス人の現代の世界史的把握にある。而もこの新らしきフランス、新らしきヨーロッパ建設の事業が――例へばその對獨提携の如きが――決して順調に進んでゐないことを思ふ時、單に國際情勢のみならず、フランス人自身が古き原理の克服、それよりの脱却が如何に困難であるか、換言すれば、フランス人が如何にこのフランス革命の精神、その展開に執着してゐるかを思はずに居られない。現代フランスを理解するためには、第三共和政のみではなく、尠くともフランス革命にまで遡らねばならない。

こゝに紹介する西海氏の著述も亦フランス革命より筆を起し、ナポレオン時代、王政復古時代、七月王國時代、第二共和政及第二帝政時代、第三共和政時代の政治的展開を極めて詳細に跡づけられつゝ、一九四〇年の戰敗にまで論及してゐられる。まことに現代フランスの理解、特にその政治史的理解には好適の書と云はねばならぬ。

而もこの書は所謂單なる政治的現象、政治制度、革命、戰爭、外交等のみを取扱ふ古き政治史ではなく、政治的變遷と共に經濟的社會的變遷も亦巧みに敍述されてゐることをあげねばならぬ。更に又第一次大戰後の情勢、フランス特有の屢々起る政變等、我國には餘り知られてゐない部分が要領よく敍述されてゐる點は、この書の特色と云へよう。

只少しく欲をいへば、十九世紀フランスの理解には、政治や經濟等と共に、不可缺なフランス文化、就中精神的、思想的諸文化については殆んど觸れられてゐないのが遺憾といはねばならぬ。現代フランスの理解は、やはりこのフランス文化を無視しては完全といへぬ。恐らく著者もこのことは熟知されつゝ、諸種の都合上省略されたかとも思ふが、少しでも觸れられてゐたならより一層輝きを增すものと考へる。

とまれ我國には類書少き時、本書の公刊は學界並に一般知識界に大いに益するものとなるであらう。（四海書房發行　定價四圓　列國現代史叢書）（前川）

フランス史學

前川貞次郎著

明治初期以來我が史學界、中にも西洋史學界に於て、壓倒的に優勢であつたのは獨逸史學であつて、今更獨逸史學の影響の下に、生れた史學理論や史學史、さては研究方法に於ける優れた、實に夥多しい業績を例證として數へ上げる迄もない事である。成程フランス史學は「嘗つて明治の初期、一時我國に盛んに紹介飜譯された」のは事實であり、亦殊にその研究に於ても、今はなき箕作元八、中村善太郎の兩教授が大先達として輝かしき足跡を學界に

殘されたのであつたが、其後かゝる業蹟を別とするならば、フランス全史に、或は史學理論に關してその著述は、よし成果の良否を不問に附するとも、殆んど五指を屈するに足りない樣だし、殊に史學史の領域に於いては最近注目すべき一二の飜譯の外、皆無と云つてよく、寔に寥々たる有樣であつて「今日專門の歷史家の中でもフランスの歷史家やその作品については常識の程度にすら知つてゐる人も極めて稀であらう」と云はれる學界の現狀は何としても淋しき限りと云はねばならない。

今回、數年來京都帝大に於てフランス史學を講ぜられてゐる新進のフランス史專攻の學徒たる著者によつて、少くともドイツ史學に對するフランス史學が、片々たる飜譯としてではなく、立派な研究として生誕を見た事は、學界の現狀に照して寔に慶賀に堪へない次第であるが、それにもまして佛蘭西史に志を持つ同學の者の喜びは望の外である。

著者は歷史の世紀と云はれる十九世紀の、然も王政復古時代の歷史家、オーギュスタン・ティエリとフランソワ・ギゾーに重心を置いてフランス史學の結晶を見んとしてゐられるのであつて、第一章「フランス革命とナポレオン」及び第二章の「王政復古期の歷史學」を讀むならば、著者が何故にフランス史學を代表し、具現するものとして、此の時代、此等の人々を選出されたかが了解されるであらう。紙幅の關係から內容の詳細なる紹介は出來ない憾はあるが、此の二章の邊は、――中にも第一章は――本書の課題が史學史、廣くは思想史の問題であるが爲めに、具體的な歷史研究は强ひて之を後に押しやらんとする努力が所々に散見されるにも拘らず、衣の內から透いてきらめく金具にも似て、近世フランス史に對する造詣の深さが到る所滲出して居り、フランスに於ても、文學史に於て取り上げられるのを常とする史學史に比し著者の含蓄は一層本書の價値を高めるものである事はことほる迄もない事である。セーニョボスに對してジャック・バンヴィルの考慮（三八―三九頁）、及び六三―六四頁に見られるフランス革命に對する簡單な展望に於ても、よく最新の研究に注目される著者の公正穩當なる態度が見られるのである。

第三章に於て、著者は在來殆んど知られなかつた、然もフランスの「歷史學のホメロス」とも稱すべきオーギュスタン・ティエリ開拓の榮譽を擔はれるべきであり、最大の力點が置かれてゐるのが認められる。彼の政治的傾向より事實に對する沈潛への變遷、及び彼の史學史上に於ける地位が刻明に描かれてゐるのである。最後に歷史家としてよりも政治家として名高きフランソワ・ギゾーが取り上げられ、彼が「政治と歷史、現實と學問の混同を」極力拒否せんとするにも拘らず依然として底に流れる政治的傾向が生彩に描寫せられてゐるが、その「文明史の講義」の邊りは興味深く讀まれたのである。

結局此の二人の業績も、本書にも述べてゐられる通りその政治的傾向の故に、その實證性に於て、亦科學性に於て、ドイツ史學に到底太刀打能はざる事は否定出來ない。思ふに歷史を敍述と考證との不愉快な礫岩としたと批難されるドイツ史學に對し「歷史

は科學であると同時に藝術である」と云ふフランス史學の今一つの傳統的性格こそドイツ史學に對し深き反省を與へるものではなからうか。紙數の關係より止むなくも簡單にせられたミシュレーに開花する此のフランス史學の性格も、他日坂口博士の「獨逸史學史」にも比肩し得るやうな「佛蘭西史學史」となつて併せて考慮されん事を望んで止まない。殊に著者は猶春秋に富むの俊秀であるが故に此の願望の一層切なるものが存するのである。

然し、本書の持つ明晰にして流麗なる文體はそれ自ら著者が深くフランス史學の本質に到達せるものである事を物語るものでなくて何であらう。敢へて江湖に薦める次第である。（教養文庫　弘文堂發行　定價五拾錢）（豐田）

日本地政學

小牧實繁著

「地政學」なる語が叫び出されてより、未だ幾何もないのであるが、現在では一の流行語、時局語と化し、地政學は興隆の波に乘つてゐるかの如き感がある。而もその本質、方法等に就いて之程種々論議をかもし、論駁を重ねられたものは尠い。又今迄の述作を見ても多くは獨逸地政學の紹介、飜譯、模倣に終始し、日本の主體性を把握した日本地政學が殆んど行はれず、却つて日本の進路を遮り、限るが如き逆效果をさへ生じたものゝあつた事は實に遺憾の極みである。最近に於ても「地政學は未だ內容も方法も定つたものではない」。「邦人の手に依つて東亞を中心とした地政學論も現れてゐるが、此等の內容は單なる時局的宣言か、或は何等具體的內容を伴はないものである」。「ゲオポリチークは地理學、民族學、史學を統一する高次のものではなく」、「素朴な環境論的な主體的把握によつて可能なものである」等と主張せられてゐる有樣である。此の時に當り、日本地政學の樹立を高唱し、その進むべき方向を明示して先覺者的役割を持つた「日本地政學宣言」の續卷、展開と見らるべき本書の刊行を見た事は大なる喜びである。

而も本書は「今や時代は學者が單なる象牙の塔にのみとぢ籠るを許さなくなつた」と時代の趨勢を深くも洞察された著者が「唯身邊の多忙を口實として」「諸新聞、諸雜誌に對する」「執筆を謝絕するが如き」を潔しとせられず「能力の許す限り執筆を承諾」され、「某雜誌の如きには遂に騙られながら執筆の約を果」されたものゝ集成である。著者はその序に於いて「併しながら君の恩、國の恩、師の恩、父母の恩なくして」「また優れた同憂の士の絕えざる鞭韃指導なくして」、「此の書の如きも遂には成り得なかつた筈である」と言ふ。かくの如くんば、此の書は結局、實に著者の止むに止まれぬ至誠から生れたものであるとすべく、著者の誠心は全篇至る所に火の塊となつて迸出してゐるのである。長期戰に於ける緒戰の戰果に醉ひ、皇軍將士の血の奮鬪に狎れて、未だに心中の米英の驅逐されないものが遺憾乍ら見出される時、かゝる誠の書の刊行を見た事はそれだけでも喜ばしい事である。